

「世が救われるために」(ヨハネ三章九〜一七節)

1 ニコデモの問い

「神は、その独り子をお与えになつたほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。今日の箇所にあるみ言葉です。この三章一六節の聖句は、福音のエッセンスが凝縮されたものとして、福音そのものとして広く愛されてきました。

ここにはたしかに、神の愛、独り子イエスによる罪のあがない、そして世のすべての人に与えられる救いなど、私どもがくり返し立ち戻るべき、くり返しそこから出発すべき礎があります。

ところでこうした教会の扱ふべき、私どもがそこに立たなければならぬ確固たる基礎をイエスが明らかにし、説き及んだのは、ニコデモという人物がある夜イエスを訪ねてなされた対話の中ででありました(真理を巡る対話には夜がふさわしいとされていた)。

したがって私どもも本当はこの二人の対話(三・一以下)を最初から見えていかなければならないのですが、今日はその余裕はありませんので、九節から、すなわちニコデモの姿が背景にしりぞぎ、イエスが「天上のこと」(一二節)を語り出されるあたりから取り上げることにします。ただニコデモという人がどういう人で、対話の中で何が問題になっていたかなどは、はじめに少し説明しておく必要があるかと思えます。

まずニコデモという人です。名前はギリシヤ風ですが、ユダヤ人で、ファリサイ派に属し、議員でもあり、したがって高い地位にあり、イスラエルの教師と認められていた人です。若くはなかつたと思います(三・四)。

彼はヨハネによる福音書に三度名前が出てきます。注目されるのは、イエスの死体の引き取り方を願ひ出たアリマタヤのヨセフと一緒にイエスを埋葬していること(一九・三九)。ここから彼は、イエスを、生前すでにメシア(キリスト)と信じていたと推察することができます。今日の箇所の前、三章の前半に記された、イエスとの出会いと対話が、ニコデモの人生を大きく転換させるきっかけとなつたであろうことは間違いありません。

さてそこでの対話はどういうものだったのでしようか。何が語り合われたのでしょうか。ニコデモが問いイエスが答えることが三回くり返されます。少しチグハグなどじめになります。

それまでの対話で話題となつていたのは、私の言葉で申し上げますと、新しく生まれることを巡つてでした。人が新しく生まれる、もう一度誕生すること。ニコデモはそれを文字通りに受けとつて、「もう一度母親の胎内に入つて生まれることはできない」(四節)などといっています。これが真剣な言い草であることは、もちろん否定すべくもありません。人が新しく生まれるということイエスは文字通りにではなく比喩的に語っているわけです。霊から生まれる、神から生まれる、つくり変えられる

ということをいつています。それは自分の力ではできない。しかし上からの力によって可能だ、できるとイエスは語っているのです。私どもが人生のそれぞれの現実を生きたながら、日々それを生きながら、その現実よりもっと深い現実、神の現実、霊の現実に生きる、それに生かされるということです。それは信仰において生きる、救われるといつてもよいのです。

このイエスの語っていることをニコデモはその時あまり分からなかったようです。三回目、最後のやりとりはこうです。

するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか」(九〜一〇節)。

「あなたは・・・分からないのか」とイエスはいつていますが、ニコデモ一人を責めているわけではありません。ですからつづけてこういつています。

はつきり言っておく。わたしは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない

(一一〜一三節)。

ニコデモだけが問題なのではないことは、ここに「あなたはわたしたちの証しを受け入れない」とあることから明らかです。

しかしそれ以上にイエスがここで「わたしたちの証し」といつていることが注目を引きます。「わたしたち」とはイエスと父なる神です。ですからイエスがニコデモに語ったこと、イエスの「証し」は、「天上のこと」であり、たんにイエスだけのお考えではなく、神のみこころなのです。「天から降って来た」人の子イエスがいまそれを明らかにしてくださいなのです。

それは何か。それはすなわち人は霊によって新しく生まれることができる、人は神によって新たな人生を生きることができ、年齢も性別も無関係、だれもがその可能性に開かれている、これがイエスの証しです。

2 青銅の蛇を上げたように

さていまも触れたイエスの言葉の中に「天から降って来た者、すなわち人の子」(一三節)というのがありました。つまりイエスは、ご自分のことを、「天から降って来た者」と語っておられるのです。この言葉は、私どもの聞き逃してはならない、重要な言明です。

重要だというのは、「天から降って来た者」が人の子イエスだとすれば、この方ははじめから天におられ、御父と共にいたということを意味しているからです。これが

一つです。

もう一つは、天から降って来た、天から降って来たというとき、それは中途半端なものではなくて、徹底的なものであったということをおもは忘れてはならないということです。この方は人となり、人のかかえるすべてを経験し、人として生き、それゆえ私どもの問題をご自分のものとし、私どもと同様に、死をも受け入れられた、しかも人びとに捨てられる死を、犯罪者として罵られる死を受け入れ、十字架の死を遂げた、そこまで「降って来た」のです。そこまでのことが「天から降って来た」という言葉にはふくまれています。使徒パウロの言葉でいえば「天から降って来た者」としてイエスは、まさしく「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順であられた」（フィリピ三・六〜八）のです。

「天から降って来た者」イエスが、人としての生活を送り、こうして最後に十字架にかけられたことが、十字架に上げられたことが、旧約聖書のある箇所¹に新たに光を当てることになったのです。

モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである（一四〜一五節）

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように」、旧約聖書（民数記二一・四〜九）に伝えられている出来事です。モーセに率いられた荒れ野を旅する中でパンも水もなく民はわれわれを死なせるためにエジプトから連れ出したのかとモーセに不満をぶつけ、言い逆らいます。すると主は民の中に「炎の蛇」を送り、民は蛇にかまれて、多くの死者を出すことになりました。民はわれわれは罪を犯した。われわれから蛇を取り除いてくれるよう神に祈ってほしいとモーセのところにやってきました。神はこうモーセに命じます。炎の蛇をつくり旗竿の先に掲げよ、蛇にかまれた人がそれを見上げれば命を得る、と。モーセは青銅で蛇をつくり、それを旗竿の先に掲げた。蛇にかまれた者らはそれを仰ぐと命を得たという故事です。

青銅の蛇が旗竿の先に上げられる、それはイエスが十字架に上げられることを（予め）示していた。十字架の上にイエスは、罪をあがなうものとして上げられた。人はそれを見上げて命を得るのです。

新しく生まれるということを巡ってニコデモと対話し、イエスの話はここまで延びてきました。新しく生まれる、霊によつて生まれる、つくり変えられる、日々の現実の中で神の現実²に生かされる、救われる、それが問題の中心でした。それはこの十字架を見上げることによつて可能となるのです。

3 世の救い

荒れ野で青銅の蛇が上げられます。そのようにイエスも十字架に上げられます。しかしイエスは、さらに死者の中からも上げられ、そして天へと上げられます。天から降

つて来た人の子イエスは、人のもつとも深い所にまで降って行って、そこから天へと上げられます。こうして人もイエスとともに神のもとに上げられます。ここに私どもの救いがあります。救いはそこに差し出されています。

受けとればよいのです。受けとるための器は要りません。それを用意することを求められてはいない。昔、尾崎放哉のこんな短詞に出会ったことがあります。器がない両手で受ける。信仰とは私どもが用意しなければならぬ器のことではない。いつてみれば信仰は信仰であるかぎり空洞です。そのまま受けとるのです。全身で、心においても体においても、喜びにおいても悲しみにおいても受けとる。信仰ということができるだけ立派な容器を用意しなければならぬというなら、それは自力救済ということになります。

自分で自分を救う道を福音は教えているわけではありません。信じる人、そこにある救いを信じて喜んで受けとる人に、すべての人に、永遠の命が与えられる道を聖書は語っているのです。

神はその独り子をお与えになつたほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである（一六〇一七節）。

「世」という言葉に注意すべきです。神は世を愛し、世を裁くためではなく、世が救われるために、御子を世に遣わされたのです。神の愛の働きの対象は、まさにこの世なのです。

世とは、聖書では、ひと言で言えば、人間世界のことです。むろんそこに私どもも入っています。私どもも（教会も）世です。世は、ときに神に敵対して、何か一つの自我をもつ存在として振る舞っています。それゆえパウロも、「この世にならつてはなりません」（ローマ一・二・二）と誡めています。世の罪や世の汚れ、世の誤りなども聖書は指摘します。

しかしそのことは決して神が、神のつくられた世を捨て、世を裁くためにだけ動くということの意味しません。有名なコリントの信徒への手紙Ⅱでパウロはこういっています、「神はキリストによって世をご自分と和解させ、人びとの罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられた」（五・一九）と。神は世を愛された。独り子を犠牲にしてまで。これが聖書の使信です。したがって神の愛した世を私どもも愛することが求められています。世を愛するとは、神が世を愛していることを世に伝えることです。神の和解と救いの言葉を世に伝えることです。教会は神のために存在するがゆえに世のために存在します。世のためには、世に神の和解の言葉を伝え、それを証しし、時の良し悪しにかかわらず伝道することです。この私どもの歩むべき道、教会の歩みべき道を、来たるべき新しい年度もたゆまずともに歩んでまいりましょう。

（二〇一九年三月一七日）